

## 30-1045 W107-4

名城大学薬学部の講義における PBL 方式導入の試み

○小森 由美子<sup>1</sup>, 平松 正行<sup>1</sup>, 加鳥 順子<sup>1</sup>, 飯田 耕太郎<sup>1</sup>, 米澤 頼信<sup>1</sup>, 原田 健一<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>名城大薬)

【目的】 薬学部 6 年制移行が 1 年後に迫っている現在, 学生自らによる「問題発見・解決型」学習 (以下, PBL: Problem based Learning と表記する) の導入は急務と考えられている. 本学でも平成 16 年度から 4 年生において PBL 方式を取り入れたカリキュラムを開始したが, 終了後に様々な問題点が抽出された. 今回はこの新たな試みと, 来年度に向けての改善点などについて報告する.

【方法】 4 年前期の実務実習前後に選択科目として 2 コマ (90 分×2) の学習時間を 6 回設けた. 学習テーマは臨床系に限らず全教員が考案し, 教員 1 名が 2 グループ (1 グループは 8~10 名) に同一テーマを与えて「討論」「調査」「発表」を行う形式とした. 学生は毎回自己評価表を提出すると共に, 6 回の PBL 終了後に学生の意見を聞くためのアンケート調査を行った.

【結果と今後の展望】 延べ 273 名, 30 グループの学生が参加し, 67 の学習テーマで PBL を実施した. アンケートでは 86% の学生が司会, 書記, 発表のうち 2 つ以上の役割を行い, 約 80% が「自分なりに努力してある程度の満足感を得た」, 「様々な役割を行うことで自信がついた」, 「情報検索や討論に積極的に参加した」と回答した. しかし討論や調査時間が十分でないと感じた学生が 56% おり, 教員からも同意見が寄せられた事, 又グループにより学習テーマと学習内容に関する満足度に偏りが生じた事など改善すべき点も抽出された. 平成 17 年度に向け学習テーマの統一, 学習時間の設定等に関する検討を行い, 今後低学年の基礎教育においても応用可能な PBL 方式を作り上げる事を目標としてゆきたい.